

copic mole と呼ぶと定義しているが、その診断基準および biological behavior は必ずしも明確ではない。今回種々の様相を呈する流産絨毛を正常および全奇胎絨毛と対比検討することによりこの microscopic mole の診断基準並びに臨床的な取扱いなどの問題点につき検討した。

方法：人工妊娠中絶40例，自然流産60例，全奇胎例5例より得られた絨毛についてまず実体顕微鏡を用い終末絨毛の形態や分岐状況，色調を観察したのち短径を測定した。次いで同検体の HE 標本を作成し中心液化，絨毛血管の消失，絨毛細胞の増殖などについて観察し，絨毛短径の大きさとこれらの所見との関連について検討した。

成績：①流産例のみならず正常絨毛にも絨毛血管の消失および中心液化，絨毛細胞の増殖の所見は低頻度ながら認められた。②短径が1mm 以下のみの場合は絨毛の中心液化，絨毛血管の消失，絨毛細胞の増殖の所見が著明なものはなかった。③肉眼的に嚢胞形成が認められない場合でも絨毛の短径が1mm 以上を示す症例には形態学的に全奇胎と全く区別し得ない症例があり，その中から2例の続発腫瘍の発生をみた。④これらの成績から日産婦分類の microscopic mole を臨床的な取扱いとの関連で二つに分け，全奇胎との関連を否定できないという意味で③ criteria を満たす症例を狭義の microscopic mole として分離し，それ以外のものは仮に hydropic degeneration と名付けることが妥当と思われる。

独創点：microscopic mole の分類と定義について考察し，臨床的取扱い指針を明らかにした点。

質問 (福島医大) 佐藤 英二

invasive mole になった症例の絨毛の形態はどのようなだったか。

回答 (近畿大) 伊藤 耕造

流産例のうち invasive mole としての経過をたどった2症例の絨毛はのう胞化した絨毛と同時に正常に近いと思われる絨毛も認められた。

質問 (広島大) 大浜 紘三

1. 全奇胎と同様の組織像を呈し，侵奇を続発するような microscopic mole は transional mole とみなすべきか，あるいは androgenetic mole とは無関係なものなのか。

2. androgenetic mole とは無関係とすると，自然流産中に占める続発変化例が高いことになり，自然流産は全奇胎と同じように厳しい術後管理が必要であることを意味していると理解すべきか。

回答

(近畿大) 伊藤 耕造

1. 60例の流産例から2例の invasive mole を続発したという意味ではなくて，今回取扱った症例の中に奇胎としての性格をもつものが2例存在していたという意味である。

2. その発生機序については今回の検討では明らかではない。

219. 絨毛癌転移機構の解明—lytic enzymes と血管新生因子の関与

(千葉大)

大崎 達也，関谷 宗英，高見沢裕吉

目的：絨毛癌の特徴の一つは早期の血行性転移であるが，そのメカニズムは不明である。今回，培養ヒト絨毛癌株細胞を用いて，細胞の分泌する lytic enzymes および血管新生因子 (TAF) と細胞の造腫瘍性，浸潤能との関係を検討した。

方法：8種類のヒト絨毛癌株細胞を用いた。造腫瘍性はハムスター頬袋移植，浸潤能はニワトリ胎児漿尿膜 (CAM) およびマウス脇腹皮下への接種により検索した。コラーゲナーゼ，プラスミノゲン活性化酵素，カテプシン B はそれぞれ基質を用いた生化学的方法により測定した。TAF は血清無添加乳酸リンゲル液培養上清を5,000×g, 10分間遠沈し，その上清をミリポア・フィルターでろ過滅菌後デスルクに浸し上記 CAM を用い活性を測定した。ゲルろ過による素分画についても測定した。

成績：①8種類の株細胞で CAM への浸潤能の強い株細胞は BeWo, NUC-1, JEC-3 であった。②8種類の株細胞で TAF 活性の高い株細胞は BeWo, NUC-1, JEC-3 であり，CAM への浸潤能とよく相関した。③CAM への浸潤能，TAF 活性と造腫瘍には相関が認められた。④CAM への浸潤能と細胞の分泌するコラーゲナーゼ活性は相関したが，他の lytic enzymes 活性とは相関しなかった。⑤TAF 活性はゲルろ過で83~105の素分画に3株細胞共通した強い活性を認め，現在分離，精製を試みている。

以上，絨毛癌の血行性転移には細胞の分泌するコラーゲナーゼなどの lytic enzymes と TAF が関与すると思われる。

独創点：絨毛癌の血行性転移の機構を細胞の分泌する lytic enzymes と TAF からアプローチした点。

質問 (旭川医大) 佐川 正

絨毛癌移植ヌードマウスでは，転移を生じることはい少ないが，そのような実験系で絨毛癌転移機構について検討するのは問題ではないか。